

特別支援学校に着目した障害者スポーツへのアクセシビリティの向上支援
—大学生ボランティア「特別支援学校スポーツすすめ隊」制度の創立—

立教大学 松尾ゼミ B

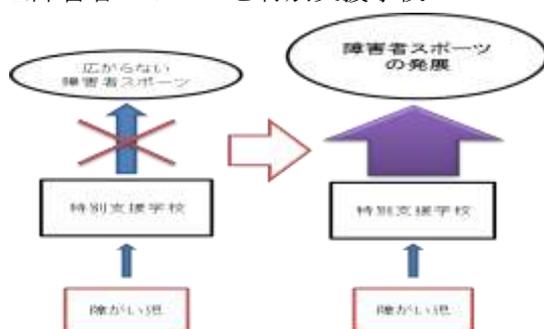
○鈴木翔太 伊藤美咲 加茂健太
草野有香 小林美咲 杉山愛梨

はじめに

現在、障害者スポーツの実施率は高いとはいえない。この背景には、障がい児・者に対するスポーツへのアクセシビリティ（接近可能性、近づきやすさ）の問題があるものと考えられる。今までの障害者スポーツの推進は、どちらかといえば成人で中途障害の方へのアプローチが中心であった。今後、障害者スポーツの推進のためには、子どものころからスポーツへのアクセシビリティを向上させていくことが重要である。

そこで今回は、特別支援学校での体育や課外活動の取り組みを調査し、スポーツへのアクセシビリティを向上する方法について検討した。障がい児たちが体育や課外活動を通して障害者スポーツの存在や楽しさを認知し、実施できれば、卒業後もそれが維持され、障害者スポーツの振興に繋がっていくものとする。そのための支援策として、大学生ボランティア「特別支援学校スポーツすすめ隊」の設立を私たちは提言する。

1.障害者スポーツと特別支援学校



この図は、障がい児・者が特別支援学校に入学し、社会に出ていくまでの流れを表したものである。子ども達が通う特別支援学校での体育や課外活動においてスポーツへのアクセシビリティの向上が達成できれば、障害者スポーツの発展が期待できると考え、特別支援学校に着目した。

図 1.「障害者スポーツの発展と特別支援学校」

2.障害者スポーツとアクセシビリティ

アクセシビリティとは「接近可能性」、「近づきやすさ」を意味する。ハード面（距離、施設・設備等）、とソフト面（パーソナル、ソーシャル、メディア等）に分類される。

ハード面もさることながら、ソフト面、なかでも障がい児・者がスポーツを「遠いもの」と感じてしまっているが故に、実施につながらないのではないかと考える。つまり、いかに障害者がスポーツを「近いもの」として感じるかがキーポイントとなる。

3.特別支援学校の実態

(1)調査概要

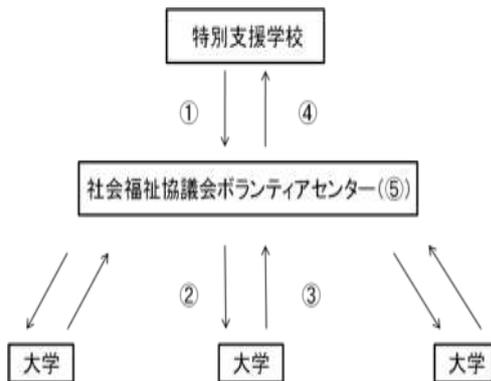
【調査対象】東京都立久留米特別支援学校 【時期】9月8日 【方法】ヒアリング調査

(2)アクセシビリティから見た特別支援学校の実態

①ハード面・・・○施設・設備など充実している。

②ソフト面・・・×アクセシビリティが低い。体育に苦手意識を持つ子どもが多い。

4.支援策 —「特別支援学校体育・スポーツすすめ隊」制度の創立—



(1)大学生ボランティアの派遣制度の創設

①特別支援学校が社会福祉協議会ボランティアセンターにボランティアを要請する。

・要請する際は、募集希望人数、各学校の規模種類などを必ず具体的にする。

・要請をする場所は、その特別支援学校がある都道府県の社会福祉協議会ボランティアセンターとする。

図 2.「大学生ボランティア派遣の流れ」

②社会福祉協議会ボランティアセンターから、各地域の大学へ発信する。

③大学は、ボランティアを担当とする部署(ボランティアセンターなど)を中心に希望学生を募集し、人数や個人情報を社会福祉協議会ボランティアセンターへ伝達する。

④ボランティア希望の申請を各大学から受けた後、特別支援学校へ連絡する。

⑤ボランティア希望学生に対して、事前研修を行う。

・ボランティアを行う本番時には、「学び」に行くのではなく「支援」できるような能力や知識をつける。

(2)モデル校の指定

現在、特別支援学校の総数は1,026校である。(文部科学省, 2012, 「学校基本調査」)そのため、1年目は10校、2年目は50校など、初期段階ではモデル校を指定し、試みる。

5.期待される効果

(1)特別支援学校の体育や課外活動の充実→子どもたちのソフト面充実

(2)障害者スポーツ実施率の向上

(3)大学生ボランティア(参加率26.5%: 学生生活白書2011)の意欲の充足と活用

<資料・文献>

学生生活白書2011 <http://www.shidairen.or.jp/blog/files/doc/11gakuseihakusho.pdf>

(2011/09/19)

文部科学省 HP <http://www.mext.go.jp/> (2011/09/08)

岡田徹・高橋紘士(2005)「コミュニティ福祉学入門」有斐閣